

本邦におけるジャパニーズスタンダード陽性率および接触皮膚炎の原因製品の検討

研究分担者 矢上 晶子 藤田保健衛生大学 医学部 皮膚科学講座 准教授

研究要旨

【背景】日本接触皮膚炎学会、日本皮膚アレルギー・接触皮膚炎学会では、日本人がかぶれやすいアレルゲンをシリーズ化(“ジャパニーズスタンダードアレルゲン 2008”)し、接触皮膚炎が疑われる症例に対してスクリーニングテスト的に貼布し、1993年からその陽性率を調査している^{1)~8)}。また、同学会では、本邦におけるアレルギー性接触皮膚炎の原因物質の実態を調査する目的で、2011年度より、皮膚テストで原因を確定できた接触皮膚炎症例の原因物質についての調査も開始している。これらの調査は、従来紙媒体で症例情報を収集してきたが、2011年に発生した旧茶のしずく石鹸による小麦アレルギーや、2013年に発生したロドデノール含有化粧品による脱色素斑などの事例が大規模に生じたことから、より迅速に症例情報が共有できるシステムの確立が急務とされてきた。そこで、我々は、Web site から化粧品等による皮膚障害事例を収集できるシステムを確立し、2013年4月より症例情報の収集を開始した。

【方法】同学会に所属する医療施設より“ジャパニーズスタンダードアレルゲン 2008”の2013年度の陽性例および2013年、2014年度にパッチテストで原因製品が明らかになった接触皮膚炎症例の症例情報を紙媒体およびWeb site で収集し検討した。

【結果】1) “ジャパニーズスタンダードアレルゲン 2008”は、2013年4月から2014年3月末までの結果をまとめた。症例は、60施設より2,209例が報告され、そのうち、Web site による入力は55施設(91.7%)、1883例(85.2%)であった。60歳代女性が多く、原疾患では接触皮膚炎が48%を占めていた。各アレルゲン別では、陽性率の高いアレルゲンは、ニッケル(15.1%)、ウルシオール(10.5%)、コバルト(8.8%)の順であった。今回の調査で陽性率が上昇する傾向にあったアレルゲンは、薬剤のフラジオマイシン(7.7%)、化粧品のパラフェニレンジアミン(PPD/染毛剤)(7.2%)、バルサムオブペルー(5.6%)、防腐剤でチメロサル(5.6%)、Kathon CG(2.7%)であった。2) Web site で入力されたアレルギー性皮膚障害事例は、2013年度は612例(男性70例、女性542例)、2014年度は121例(男性24例、女性97例)が報告された。30日の以上治療を必要とし、入院加療を要した症例の原因製品は医薬品と化粧品で95%(38例)を占めていた。入院の有無に関わらず、アレルギー性皮膚障害事例として報告された733例中、250例(34%)が30日以上治療を必要としていた。3) 非アレルギー性皮膚障害事例は、入院を要した症例は報告されていなかったが30日以上治療を要した症例は2013年で11例、2014年で3例あり、これらの原因製品は、医療関連用品による化学熱傷が1例、化粧品による刺激性接触皮膚炎が4例、化粧品による脱色素斑が8例であった。

【結語】2015年5月現在で、2014年度の報告症例数は、2013年度に比べ少ないが、症例は入力されつつあり、徐々に本症例情報システムが稼働し始めていることを示唆している。また、30日以上治療を要したアレルギー性接触皮膚炎の重症例は全体の34.1%を占めており、本システムが全国の医療施設で稼働し、早期に原因製品(物質)が同定され、産官学で情報が連携・共有されれば、健康被害や医療費を最小限に抑えられることが予想される。

A . 研究目的

2013、2014 年度の“ ジャパニーズスタンダードアレルギー 2008 ”の陽性率、パッチテストで原因製品が明らかになったアレルギー性及び非アレルギー性皮膚障害事例を収集し、本邦における接触皮膚炎をはじめとした皮膚障害事例の動向を調査する。また、2013 年 4 月より開始した Web site での症例情報の入力状況および問題点を検討する。

B . 研究方法

➤ 対象医療施設：平成 26 年 4 月に日本皮膚アレルギー・接触皮膚炎学会会員のうち、これまで症例報告実績のある 146 施設、および日本皮膚科学会認定専門医主研修施設に対して合計 200 施設

➤ 調査および検討内容(調査期間)：

“ ジャパニーズスタンダードアレルギー 2008 ”の陽性率(2013 年 4 月～2014 年 3 月)
パッチテストで確認できたアレルギー性皮膚障害事例(2013 年 4 月～2015 年 3 月)
非アレルギー性皮膚障害事例
(2013 年 4 月～2015 年 3 月)

➤ 症例情報回収方法：

パッチテスト、プリックテストの実施例の結果を Web site に入力もしくはアンケート用紙(紙媒体)に記入していただき郵送で回収した。

(倫理面への配慮)

本研究は、藤田保健衛生大が主研究施設となり、本学倫理委員会(承認番号 14-041)で承認されている。また、各症例情報の個人情報は各施設において削除された上で登録されている。

C . 研究結果

ジャパニーズスタンダードアレルギーの陽性率と年次推移

1)対象期間：2013 年 4 月～2014 年 3 月

2)集計総数：2209 例(男性 533 例、女性 1676 例)
(図 1)

3)集計参加施設数：60 施設

4)Web site 入力率：

Web site 入力 55 施設(91.7%)、1883 例(85.2%)
(紙送付事務局入力 5 施設 326 例)

前年度まで紙媒体で情報を収集していたが、今回の調査では、9 割を超える施設が Web site より症例情報の入力を開始していた。

5)原疾患：パッチテスト貼布時の原疾患は接触皮膚炎が 1055 例(48%)例と最も多く、次いで金属アレルギー 344 例(16%)、アトピー性皮膚炎 208 例(9%)の順であった(図 2)

6)“ ジャパニーズスタンダードアレルギー 2008 ”陽性率(表 1)：最も高い陽性率であったアレルギーは硫酸ニッケル 15.1%であり、次いでウルシオール 10.5%、塩化コバルト 8.8%、重クロム酸カリウム 7.7%の順であった。

7)ジャパニーズスタンダードアレルギー陽性率の推移：

金属アレルギー；金属アレルギーの陽性率は、2009 年に一旦低下したが、その後塩化第二水銀以外の硫酸ニッケル、塩化コバルト、重クロム酸カリウムの陽性率が高くなっている(図 3)

ゴム関連アレルギー；ゴム関連アレルギーでは、チウラムミックスの陽性率が2010年、2011年と高くなっていましたが、2012年度は3.5%と低下し、2013年度も3.4%と僅かに低下していた（図4）

外用剤アレルギー；外用剤アレルギーでは硫酸フラジオマイシンの陽性率が2010年以降徐々に上昇しており、2013年度では7.7%に達している。一方、カインミックスの陽性率は2%程度で推移している（図5）

化粧品関連アレルギー；化粧品に関連するアレルギーでは、PPDは7%台、香料ミックスは6%台を推移している。ペルーバルサムの陽性率は2005年以降徐々に増加しており、2012年度は一時陽性率が下がった(4.5%)が2013年度は再度上昇した(5.6%)（図6）

合成樹脂関連アレルギー；合成樹脂関連アレルギーでは、ロジン及びエポキシ樹脂の陽性率は特に変わらないが、パラターシャリーホルムアルデヒドレジンの2012年度陽性率は2010年度(1.8%)、2011年度(0.9%)の1/2に低下したが2013年度は再び上昇した(1.3%)（図7）

防腐剤関連アレルギー；チメロサルが5.6%と上昇していた。パラベンミックスは2%台、ホルムアルデヒドは1%未満を推移している。1993年以降1%前後の陽性率であったKathon CG（ケーソンCG）の陽性率が2011年度の2.7%に引き続き2012年度は2.0%、2013年度は2.7%と再び上昇の傾向である（図8）

植物関連アレルギー；ウルシオール、セスキテルペンラクトンミックス、プリミンの陽性率には特に変化を認めなかった（図9）

Web siteで入力されたアレルギー性皮膚障害事例

1)対象期間：

2013年4月1日～2015年3月31日

集計総数：2013年度612例（男性70例、女性542例）、2014年度121例（男性24例、女性97例）（図10、図11）

2)アレルギー性皮膚障害事例の性別・年齢

40歳代と60歳代の女性が多い結果であった。

3)アレルギー性皮膚障害事例の原因製品の

種類；原因製品の種類は総務省 日本標準商品分類

<http://www.stat.go.jp/index/seido/syouhin/2index.htm> にしたがって分類した（図12）

パッチテストで確定された原因製品の種類は化粧品が461例(62.9%)と最も多く次いで医薬品124例(17%)であった。化粧品の内訳ではシャンプーが最も多く、洗顔料、美容液の順であった（表2、表3）

4)Web siteで入力されたアレルギー性皮膚障害事例の治療期間

30日以上の治療を要し、入院を必要とした症例では、2013年度は37例、2014年度では3例であった。また、同様の期間治療を要し、入院を必要としなかった症例は2013年度164例、2014年度46例であった（表4）

Web site で入力された非アレルギー性皮膚
障害事例

1) 対象期間

2013 年 4 月 1 日 ~ 2015 年 3 月 31 日

集計総数

2013 年度 40 例、男性 6 例、女性 34 例

2014 年度 17 例、男性 2 例、女性 15 例

(図 13、図 14)

2) 非アレルギー性皮膚障害事例の性別・年齢
女性の割合が高く、特に 70 歳代女性が多いこ
とが明らかとなった。

3) 非アレルギー性皮膚障害事例の原因製品の
種類；原因製品の種類は総務省 日本標準商品
分類

2013 年度、2014 年度共に化粧品による非ア
レルギーの皮膚障害が多かった (図 15、表 6)

4) Web site で入力された非アレルギー性皮膚
障害事例の治療期間と原因製品

非アレルギー性皮膚障害事例で入院を要し
た症例は報告されていなかった。しかしながら、
30 日以上治療を要した症例は 2013 年度で 11 例、
2014 年度で 3 例あり、これらの具体的な原因製
品は、医療関連用品による化学熱傷が 2014 年
度に 1 例、化粧品による刺激性接触皮膚炎が
2013 年度 3 例、2014 年度 1 例の計 4 例、化粧
品による脱色素斑が 2013 年度は 8 例あったが
2014 年度は報告がなかった (表 7、表 8)

D. 考察

Web site による症例の登録

2013 年 4 月より Web site での症例情報の
収集を開始した。ジャパニーズスタンダードア
レルゲンの集計では、集計に参加した 60 施設
のうち 55 施設 (91.7%) (1883 例、85.2%) が
Web site で入力していた。今回情報を入力し
た施設 (60 施設) 中、9 割を超える施設が Web
site より症例情報の入力を開始しており、本
システムが対象となる医療施設において利用
され始めていることが明らかとなった。

ジャパニーズスタンダードアレルゲンの陽性
率と年次推移

登録された症例は、60 歳代女性が多く、原
疾患は接触皮膚炎が 48% を占めていた。

各アレルギー別では、陽性率の高いアレル
ゲンは、ニッケル (15.1%)、ウルシオール
(10.5%)、コバルト (8.8%) の順であった。
2013 年に陽性率が上昇する傾向にあったアレ
ルゲンは、薬剤のフラジオマイシン (7.7%)、
化粧品で PPD (7.2%)、バルサムオブペルー
(5.6%)、防腐剤でチメロサル (5.6%)、Kathon
CG (2.7%) であった。1993 年以降 1% 前後の陽
性率であったケーソン CG の陽性率が 2011 年度
の 2.7% に引き続き 2012 年度は 2.0%、2013 年度
は 2.7% と再び上昇の傾向である。ケーソン CG
とはメチルクロロイソチアゾリノン
(methylchloroisothiazolinone) というイソチ
アゾリン系防腐剤の 1 つであり、「メチルイ
ソチアゾリノン」と「メチルクロロイソチアゾ
リノン」の混合物の商品名である。2004 年にケ
ーソン CG に含まれるメチルイソチアゾリノ
ンについては、クリームや乳液などの洗い流さ
ない製品 (leave on 製品) にも 0.01% まで使用

が許可され、現在日本で発売されている leave on 化粧品への使用が増加していることがケーン CG、メチルイソチアゾリノンを含むイソチアゾリン系防腐剤の感作の増加に影響していると推察される(図8)。陽性率が上昇しているアレルゲンに関してはその要因を検討する必要があると考える。

Web site で入力されたアレルギー性皮膚障害事例

今回も、パッチテストで確定された原因製品の種類は化粧品(461例(62.9%))と最も多く次いで医薬品(124例(17%))であった。旧茶のしずく石鹸の事例やロドデノール誘発性脱色素斑の事例など、これからもさまざまな安全性に関わる重要な事例が発生することが予測され、このシステムが十分に稼働すれば、より迅速に情報を収集し、被害の拡大を防ぐことができると思われる。

アレルギー性接触皮膚炎症例の総数は733例であった。30日以上治療で入院を要した症例の割合は5.5%、30日以上治療で入院を必要としなかった症例の割合は28.6%となり、両者を合わせると、アレルギー性接触皮膚炎の治療を30日以上要した症例は34.1%となる。このことは、アレルギー性接触皮膚炎は原因物質もしくは症例によって3割の患者が重症化し、治療が長期的にかかることを示唆している。

30日以上治療を必要とし、入院を要した症例の原因製品は医薬品、化粧品で95%を占めていた。また、30日以上治療を要し、入院を必要としなかった症例でも、化粧品による症例が114例、医薬品による症例は28例あり、化粧品、医薬品による皮膚障害は今後も注意が必要である。(表5)

非アレルギー性皮膚障害事例

入院を要した症例は報告されていなかったが30日以上治療を要した症例は2013年で11例、2014年で3例あり、これらの具体的な原因製品は、医療関連用品による化学熱傷が2014年度に1例、化粧品による刺激性接触皮膚炎が2013年度3例、2014年度1例の計4例、化粧品による脱色素斑は、2013年度は8例あったが2014年度は報告がなかった。この2年間では、新規の大規模な有害事例はなく、化粧品成分による脱色素斑の事例は収束に向かっていることが示唆された。

E. 結論

- ・2014年度は、2013年度に比べ報告症例数が未だ少ないが、“ジャパニーズスタンダードアレルゲン2008”は、登録に参加した60施設中55施設(91.7%)から1883例(85.2%)がWeb siteより入力されており、Web siteを介した入力システムが学会員に徐々に浸透していることが明らかとなった。
- ・30日以上治療を要したアレルギー性皮膚障害の重症例は同障害例全体の34.1%を占めた。全国の対象となる医療施設が本システムを利用し、早期に原因製品(物質)が確認され、産官学で情報が連携・共有されれば、健康被害や医療費を最小限に抑えられることが予想される。
- ・“リアルタイムで症例情報を収集する”という目的で確立された、本症例情報システムが十分に稼働するよう、今後もさらなる啓発活動や取り組みが必要である。

<参考文献>

- 1) Adachi A ; Results of patch test with standard allergen series of the Reserch Group of the Japanese Society for Contact Dermatitis in 1994 and annual variations of patients with pigmented contact dermatitis of lichenoid type in 1993; Environ.Dematol 3:140-150,1996
- 2) Miyoshi H; Large-scale patch-testing with Japanese standard series, gold sodium sulfate, thimerosal, and mercuric chloride, and the number of new patients with pigmented contact demaritis in 1994; Environ.Dematol 4:95-103,1997
- 3) Mitsuya K;A multicenter survey of patch-testing with Japanese standard series, topical steroid preparations (budesonide, amcinonide and hydrocortisone butylate) and tin chloride (0.5%, 1.0% and 2.0% pet) in 1997 ; Environ.Dematol 6:199-208,1999
- 4) Natsuaki M; Results of patch testing with standard allergens of the Japanese Society for Contact Demaritis and topical nonsteroidal anti-inflammatory preparations in 1998; Environ.Dematol 7:1-5,2000
- 5) Sugiura M;Group study with standard allergen series of the Japanese Society for Contact Dermatitis and gold sodium thiofate by patch testing in 1999; Environ.Dematol 9:105-115,2002
- 6) Kurikawa Y;Group study of the optimum concentrations of ketoprofen, tiaprofenic acid, suprofen and oxybenzone for the photopatch testing, and the patch test results of the Japanese Standard Allergens and gold sodium thiosulfate in 2000.; Environ.Dematol 9:39-46,2002
- 7) Hizawa T, Group study of the optimum patch testing concentrations of skin whitening agents ang the results of patch testing with Standard Allergens of the Japanese Society for Contact Dermatitis in 20003, J Environ Dermatol 12, 137-142,2005
- 8) 鈴木加余子, 松永佳世子, 矢上晶子他; ジャパニーズスタンダードアレルギー(1994)の 2005 年度~2007 年度陽性率とジャパニーズスタンダードアレルギー(2008)の 2009 年度陽性率, J Environ Dermatol and Cutaneous Allergology 6, 67-84,2012

F . 健康危険情報

本研究において、特に健康危険が生じた事例はない。

G . 研究発表

1 . 論文発表

1. Nakamura M, Yagami A, Hara K, Sano A, Kobayashi T, Aihara M, Hide M, Chinuki Y, Morita E, Teshima R, Matsunaga K. A new reliable method for detecting specific IgE antibodies in the patients with immediate type wheat allergy due to hydrolyzed wheat protein: correlation of its titer and clinical severity. Allergol Int. 2014;63(2):243-9.
2. Yagami A, Suzuki K, Morita Y, Iwata Y, Sano A, Matsunaga K. Allergic contact dermatitis caused by 3-o-ethyl-L-ascorbic acid (vitamin C ethyl). Contact Dermatitis. 2014;70(6):376-7.
3. 矢上 晶子, 松永 佳世子. 皮膚のアレルギーのトピックス . 皮膚と美容 . 2014;46(2):55-59.
4. 森田 雄介, 矢上 晶子, 伊佐見 真実子, 西村 景子, 佐野 晶代, 鈴木 加余子, 松永 佳世子. 藤田保健衛生大学病院における 2006 ~ 2010 年の職業性接触皮膚炎の 38 例のまとめ. J Environ Dermatol Cutan Allergol. 2014;8(2):80-87.
5. 森田 雄介, 矢上 晶子, 鈴木 加余子, 佐野 晶代, 松永 佳世子. Japanese standard allergen series におけるゴム関連アレルギー mix 陽性 21 例の臨床的検討. J Environ Dermatol Cutan Allergol. 2014;8(3):167-174.

6. 西 和歌子, 矢上 晶子, 西村 景子, 佐野 晶代, 安部 正通, 高橋 正幸, 松永 佳世子. 化粧品パッチテスト 2011 年のまとめ. J Environ Dermatol Cutan Allergol. 2014;8(4):255-263.

2. 学会発表

1. 矢上晶子. 知っておきたい化粧品によるアレルギー. 第 44 回日本皮膚アレルギー・接触皮膚炎学会総会学術大会; 仙台. 2014.11.21 ~ 23.
2. 矢上晶子, 鈴木加余子, 佐野晶代, 森田雄介, 小林東, 岩田洋平, 松永佳世子. 別々の美白化粧品によりアレルギー性接触皮膚炎と脱色素斑を含有した一例. 第 269 回日本皮膚科学会 東海地方会. 大正製薬(株)名古屋支店. 2014.9.21. 愛知.
3. 佐野晶代, 矢上晶子, 山北高志, 小林東, 岩田洋平, 有馬豪, 鈴木加余子, 山田雅啓, 松永佳世子. 最近経験したラテックスアレルギーの 3 例. ラテックスアレルギー・OAS フォーラム 2014, 第 19 回日本ラテックスアレルギー研究会. 一橋大学一橋講堂. 2014.7.27. 東京.
4. 松永佳世子, 鈴木加余子, 矢上晶子, 秋田浩孝, 佐野晶代, 田中紅. ロドデノール誘発性脱色素斑 111 例と他の美白剤等による脱色素斑が疑われた 21 例の臨床像と治療経過. 第 32 回日本美容皮膚科学会学術大会. 東京ベイ舞浜ホテルクラブリゾート. 2014.7.12-7.13. 千葉.
5. 松永佳世子, 矢上晶子, 中村政志, 佐野晶代, 小林東. グルパール 19S 経皮感作による全身性コムギアレルギーの全国調査小児例 35 例の疫学調査と免疫学的検査結果のまとめ. 第 38

回日本小児皮膚科学会. セルリアンタワー東急ホテル. 2014.7.5-7.6. 東京.

6. 鈴木加余子, 伊藤紫, 西和歌子, 佐々木良輔, 佐野晶代, 矢上晶子, 松永佳世子. 当院 ICU で入院治療を要したアナフィラキシー患者(小児例を除く)のまとめ. 第 268 回日本皮膚科学会 東海地方会. 大正製薬名古屋支店. 2014.6.8. 愛知.
7. 齋藤健太, 矢上晶子, 山北高志, 佐野晶代, 小林東, 沼田茂樹, 安藤亜紀, 松永佳世子. 経皮感作による魚アレルギーの 1 例. 第 268 回日本皮膚科学会東海地方会. 大正製薬名古屋支店. 2014.6.8. 愛知.
8. 矢上晶子, 松永佳世子. 経皮感作による食物アレルギーの病態と治療. 第 26 回日本アレルギー学会春季臨床大会. 国立京都国際会館. 2014.5.9-5.11. 京都.
9. 佐野晶代, 矢上晶子, 小林東, 中村政志, 有馬豪, 岩田洋平, 松永佳世子. 小麦依存性運動誘発アナフィラキシー 37 例の臨床経過と小麦関連 IgE の経時的変化. 第 26 回日本アレルギー学会春季臨床大会. 国立京都国際会館. 2014.5.9-5.11. 京都.

< 国際学会 >

1. Nakamura M, Yagami A, Matsunaga K. Antigen in Glupearl 19S were developed by acid-heat treatment. American Association of Asthma, Allergy and Immunology Annual Meeting 2015, Feb. 20-24, 2015.
2. Yagami A, Suzuki K, Nakamura M, Sano A, Arima M, Iwata Y, Kobayashi T, Hara K, Matsunaga K. Clinical analysis of immediate hypersensitivity to hydrolyzed wheat proteins in soap. American Association of

H. 知的財産権の出願・登録状況

1. 特許取得 なし
2. 実用新案登録 なし
3. その他 なし

分類別	2013年度	2014年度	計
スポーツ用品・衣類	8	4	12
医薬品	99	26	125
医療関連用品	4	4	8
衛星材料	5		5
化粧品	401	60	461
家庭用化学製品	2		2
家庭用合成洗剤	7	1	8
歯みがき	8	2	10
歯科材料	8	3	11
手袋	14	3	17
装身具	4	1	5
楽器関連品	1		1
住居・生活用品	1	3	4
記載なし	47	10	57
不明	3	4	7
計	612	121	733

表2 アレルギー性：原因製品の種類

ジャパニーズスタンダードアレルギー2013年度陽性率				
Allergens	貼布症例数	陽性数	陽性率	
1	Nickel sulfate	2104	317	15.1
2	Urushiol	1901	200	10.5
3	Cobalt chloride	2110	186	8.8
4	Fradimycin sulfate	1901	147	7.7
5	Potassium dichromate	1958	146	7.5
6	p-Phenylenediamine	1861	134	7.2
7	Fragrance mix	1956	118	6
8	Mercuric chloride	1961	113	5.8
9	Balsam of Peru	1958	110	5.6
10	Thimerosal	1541	86	5.6
11	Gold sodium thiosulfate	2053	107	5.2
12	Thiuram mix	1945	66	3.4
13	Lanolin alcohol	1961	53	2.7
14	Kathon CG	1909	51	2.7
15	Caine mix	1926	48	2.5
16	Rosin	1945	47	2.4
17	Paraben mix	1959	41	2.1
18	Formaldehyde	1939	38	2
19	p-t-Butylphenol Formaldehyde Resin	1930	26	1.3
20	PPD black rubber mx	1942	23	1.2
21	Dithiocarbamate mix	1940	24	1.2
22	Primin	1780	16	0.9
23	Sesquiterpene lactone mix	1550	12	0.8
24	Epoxy resin	1775	13	0.7
25	Mercapto mix	1944	12	0.6
	Distilled water	1706	2	0.1
	Petrolatum	2140	1	0

表1 “ジャパニーズスタンダードアレルギー2008”陽性率一覧

化粧品	2013年度	2014年度	計
シャンプー	71	6	77
洗顔料	47	4	51
化粧水	33	5	38
美容液	31	3	34
メイクアップベース	21	6	27
クリーム	22	3	25
化粧石けん	22	1	23
乳液	20	2	22
ヘアカラー	15	3	18
不明	14	4	18
ファンデーション	13	3	16
ヘアトリートメント	14	1	15
日焼け止め化粧品	11	4	15
リップクリーム	8	4	12
パック	9	1	10
つめ化粧品	8		8
まつげ化粧品	3	3	6
整髪料	6		6
ボディソープ	4	1	5
ほほべに	4	1	5
パーマントウェーブ液	4		4
化粧用油	4		4
石けん	4		4
おしろい	3		3
リンス	2	1	3
アイシャドウ	1	1	2
ヘアトニック	2		2
口紅	2		2
アイメイク用品		1	1
コンディショナー	1		1
ハンドクリーム	1		1
ハンドソープ		1	1
フェイシャルリンス	1		1
リップグロス		1	1
計	401	60	461

表3 アレルギー性：化粧品の内訳

30日以上の治療	2013	2014	計
入院あり	37	3	40
入院なし	164	46	210
	201	49	250

30日未満の治療	2013	2014	計
入院あり	7	1	8
入院なし	404	71	475
	411	72	483

表4 アレルギー性：原因製品

30日以上の治療 <入院あり>				
診断名	原因製品	2013	2014	計
アレルギー性接触皮膚炎	医薬品	13	2	15
	化粧品	23		23
	手袋	1		1
その他の診断	医薬品		1	1
	計	37	3	40

30日以上の治療 <入院なし>				
診断名	原因製品	2013	2014	計
アレルギー性接触皮膚炎	スポーツ用品・衣類	4	2	6
	医薬品	19	9	28
	医療関連用品		1	1
	衛生材料	3		3
	化粧品	92	22	114
	家庭用合成洗剤	2	1	3
	歯みがき	4	1	5
	歯科材料	1		1
	手袋	3	1	4
	装身具	1		1
	楽器関連品	1		1
	住居・生活用品	1	1	2
	記載なし	7	2	9
	不明	1	2	3
	化粧品	1		1
アレルギー性接触蕁麻疹(症候群)	手袋	2		2
	医薬品	1	2	3
その他の診断	化粧品	8		8
	歯みがき	1		1
	歯科材料	3		3
	記載なし	3	1	4
経口摂取による即時型アレルギー	化粧品	4		4
	記載なし	2	1	3
	計	164	46	210

表5 アレルギー性：30日以上の治療

分類別	2013年度	2014年度	計
医薬品		2	2
医療関連用品		1	1
化粧品	18	6	24
家庭用合成洗剤		1	1
記載なし	21	6	27
住居・生活用品	1		1
不明		1	1
計	40	17	57

表6 非アレルギー性：原因製品の種類別

30日以上の治療	2013年度	2014年度	計
入院なし	11	3	14

30日未満の治療	2013年度	2014年度	計
入院なし	29	14	43

表7 非アレルギー性：治療期間

30日以上の治療 <入院なし>				
診断名	原因製品	2013	2014	計
化学熱傷	医療関連用品		1	1
刺激性接触皮膚炎	化粧品	3	1	4
白斑・脱色素斑	化粧品	8		8
	記載なし		1	1
	計	11	3	14

表8 非アレルギー性：30日以上の治療

年齢性別分布

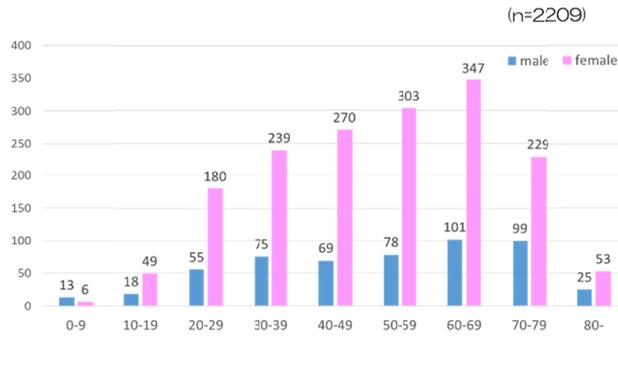


図1 ジャパニーズスタンダードアレルゲン：年齢性別分布

疾患名

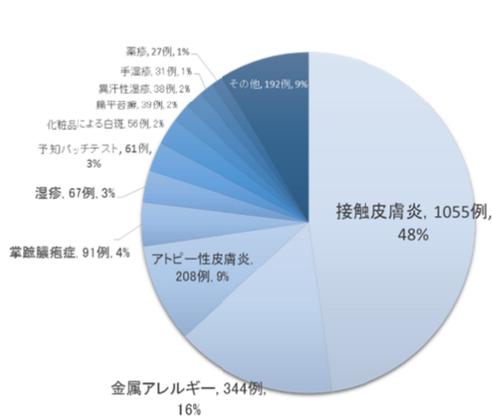


図2 ジャパニーズスタンダードアレルゲン：原疾患名

金属

Year	1994	1995	1997	1998	1999	2000	2003	2005.4-2008.3	2009	2010	2011	2012
Cobalt chloride	17.3%	18.6%	18.4%	17.2%	14.3%	14.5%	18.9%	11.1%	6.4%	7.6%	8.8%	9.1%
Nickel sulfate	13.5%	14.4%	13.8%	16.2%	12.4%	15.5%	17.5%	11.9%	11.6%	14.2%	15.2%	16.1%
Potassium dichromate	9.2%	7.7%	9.2%	13.7%	9.7%	10.6%	13.6%	7.3%	6.6%	8.3%	7.0%	8.1%
Ammoniated mercuric chloride	7.3%	6.9%	7.0%	7.4%	6.8%	8.0%	6.3%	3.2%	5.0%	5.7%	6.2%	5.4%
Gold sodium thiosulfate	nt	10.7%	nt	8.3%	6.9%	7.0%	6.2%	5.9%	3.5%	3.0%	4.5%	5.4%

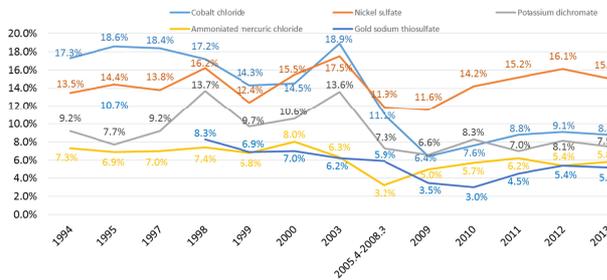


図3 金属アレルギー

ゴム添加物

Year	1994	1995	1997	1998	1999	2000	2003	2005.4-2008.3	2009	2010	2011	2012	2013
Thiuram mix	2.6%	2.2%	1.6%	2.0%	2.0%	2.3%	4.2%	3.0%	3.6%	5.2%	5.3%	3.5%	3.4%
PPD black rubber mix	1.2%	1.4%	1.2%	1.5%	1.0%	1.1%	2.4%	1.3%	1.8%	1.7%	1.7%	1.8%	1.2%
Mercapto mix	0.6%	0.8%	1.0%	0.7%	0.7%	0.8%	1.2%	0.9%	1.0%	1.4%	0.8%	0.8%	0.6%
Dithiocarbamate mix	0.5%	0.5%	0.9%	0.5%	0.6%	1.3%	1.1%	1.3%	1.3%	1.5%	1.1%	1.0%	1.2%

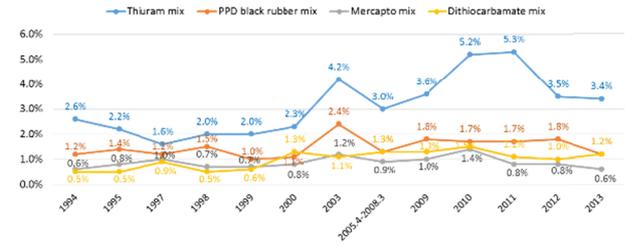


図4 ゴム関連アレルゲン

薬剤

Year	1994	1995	1997	1998	1999	2000	2003	2005.4-2008.3	2009	2010	2011	2012	2013
Caine mix	1.8%	3.0%	2.3%	2.4%	1.4%	2.6%	2.8%	2.5%	4.0%	3.0%	2.1%	2.3%	2.5%
Fradiomycin sulfate	4.0%	3.8%	4.9%	5.9%	6.0%	5.0%	3.9%	7.4%	6.0%	5.6%	6.0%	7.0%	7.7%

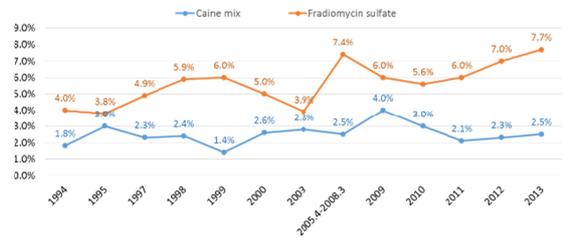


図5 外用剤アレルギー

化粧品

Year	1994	1995	1997	1998	1999	2000	2003	2005.4-2008.3	2009	2010	2011	2012	2013
Balsam of Peru	5.2%	4.5%	3.4%	4.0%	4.0%	4.0%	4.6%	4.0%	4.4%	5.1%	5.7%	4.5%	5.6%
Fragrance mix	5.8%	4.9%	3.6%	4.8%	5.0%	5.6%	4.0%	6.2%	6.4%	5.7%	6.1%	6.6%	6.0%
PPD	6.1%	7.1%	5.0%	4.8%	4.5%	5.7%	7.9%	5.7%	7.0%	6.2%	6.6%	7.1%	7.2%
lanolin alcohol	2.8%	3.3%	1.8%	2.7%	2.7%	3.6%	2.7%	2.9%	1.8%	2.0%	2.8%	2.1%	2.7%

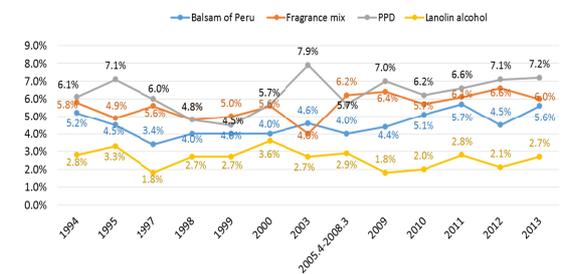


図6 化粧品関連アレルギー

合成樹脂

Year	1994	1995	1997	1998	1999	2000	2003	2005.4-2008.3	2009	2010	2011	2012	2013
Rosin	2.3%	2.2%	1.7%	2.3%	2.0%	2.2%	3.2%	2.4%	2.3%	2.5%	2.4%	2.3%	2.4%
p-t-BPFR	1.7%	1.3%	1.2%	1.5%	1.9%	2.2%	1.9%	1.9%	1.5%	1.9%	1.8%	0.9%	1.3%
Epoxy resin	nt	0.9%	1.0%	0.7%	0.5%	0.7%							

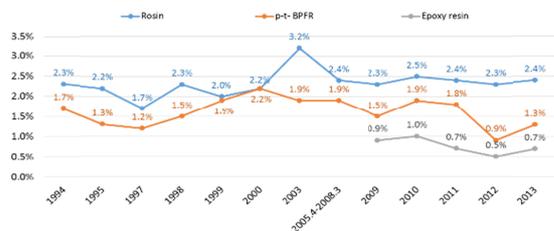


図7 合成樹脂関連アレルギー

2013年～2014年度

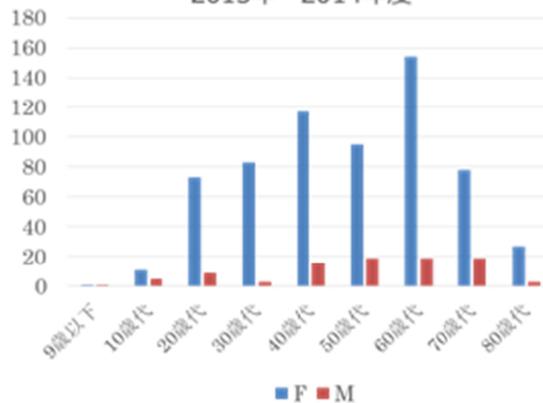


図10 アレルギー性：
性別・年齢 2013～2014

防腐剤

Year	1994	1995	1997	1998	1999	2000	2003	2005.4-2008.3	2009	2010	2011	2012	2013
Thimerosal	4.7%	5.8%	4.7%	5.6%	4.6%	4.8%	3.9%	3.8%	2.9%	3.4%	4.6%	4.3%	5.6%
Paraben mix	1.8%	1.5%	1.1%	1.3%	1.3%	1.7%	1.9%	1.2%	2.5%	2.6%	2.0%	2.2%	2.1%
Formaldehyde	1.2%	2.6%	2.4%	4.0%	3.6%	1.6%	2.7%	1.5%	2.0%	2.0%	2.3%	2.3%	2.0%
Kathon CG	1.3%	1.5%	0.9%	1.6%	1.1%	0.9%	1.0%	1.1%	1.2%	1.9%	2.7%	2.0%	2.7%

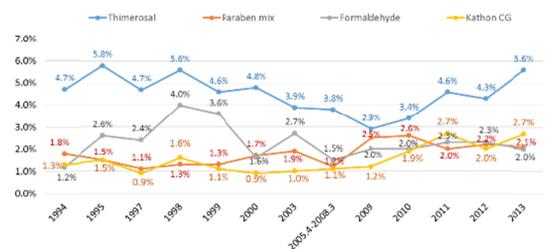
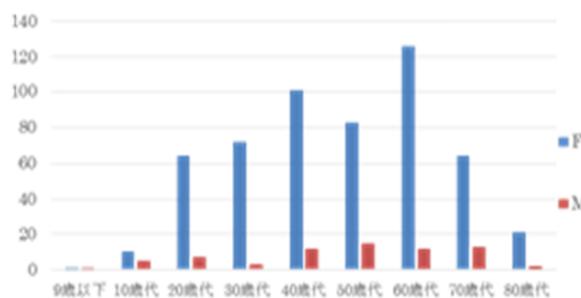


図8 防腐剤関連アレルギー

2013年度



植物

Year	1994	1995	1997	1998	1999	2000	2003	2005.4-2008.3	2009	2010	2011	2012	2013
Primin	0.7%	0.6%	0.6%	0.8%	1.0%	1.6%	1.4%	0.7%	0.8%	0.8%	0.7%	0.6%	0.9%
Urushiol	9.3%	10.4%	8.8%	8.5%	8.8%	9.9%	7.2%	7.5%	10.3%	11.5%	10.5%	11.4%	10.5%
Sesquiterpene lactone mix	nt	nt	nt	nt	nt	nt	nt	nt	1.5%	1.0%	1.0%	1.2%	0.8%

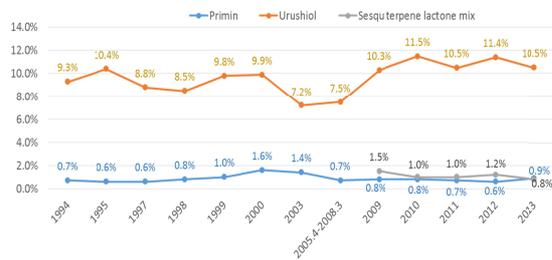


図9 植物関連アレルギー

2014年度

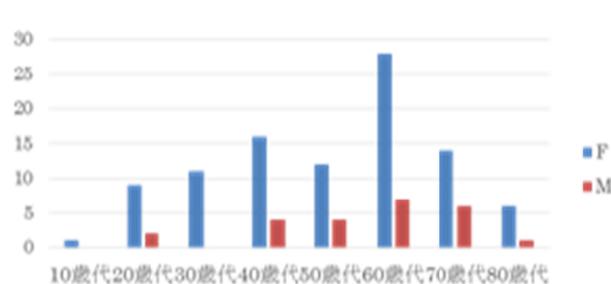


図11 アレルギー性：
性別・年齢 2013・2014

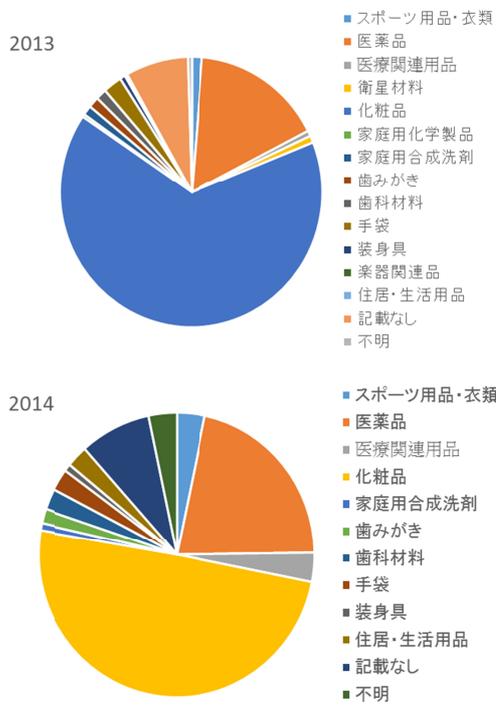


図12 アレルギー性：原因製品の種類

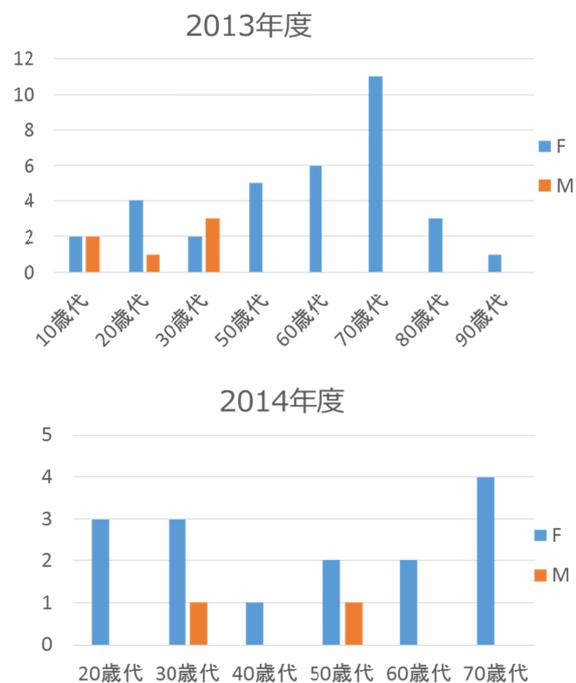


図14 非アレルギー性：
性別・年齢 2013・2014

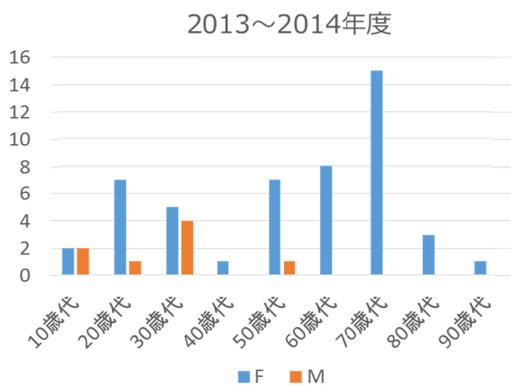


図13 非アレルギー性：
性別・年齢 2013～2014

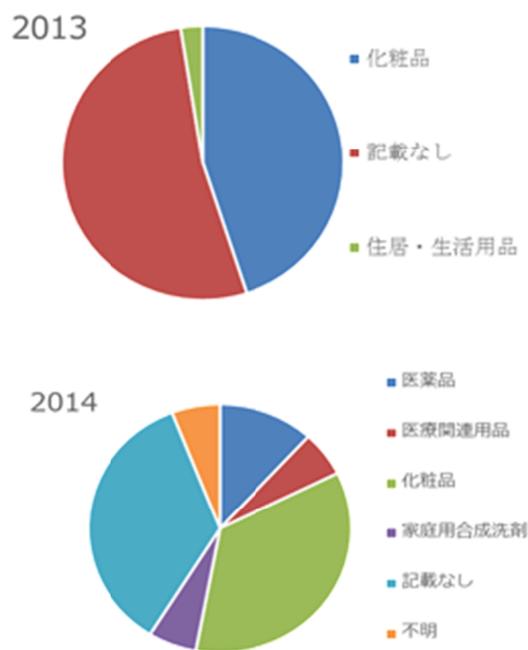


図15 非アレルギー性：
原因製品の種類 2014

